

「樵夫歌事」考

——『宇治拾遺物語』第四十話の場について——

鈴木 和 大

一. はじめに

十三世紀に成立したとされる『宇治拾遺物語』には種々の説話が存し、その中には和歌説話もいくつか存するが、次に示す説話もそのひとつである。⁽¹⁾

四十 樵夫歌事

今は昔、木こりの、山守^{やまもり}に斧^{よき}をとられて、「わびし、心うし」と思て、つら杖うちつきておりける。山守見て、「さるべきことを申せ。とらせん」といひければ、

あしきだになきはわりなき世中によきをとられて我いかにせん

とよみたりければ、山守、返しせんと思て、「うゝ、く」とうめきけれど、えせざりけり。さて、斧返しとらせてければ、うれしと思けりとぞ。

人はたゞ、歌をかまへてよむべしと見えたり。

(新日本古典文学大系)

説話の内容を確認しておく、次のようになろうか。あるとき、樵夫が山守に斧を取り上げられ、山守から「しかるべきことを申せ、さすれば斧を返そう」と提案される。すると樵夫は、「あしきだに……(悪いものでさえ、なければ困るこの世の中、善きものをとられて私はどうすればよいのか)」と歌を詠んだ。この歌に対して山守は返歌が思いつかず、「うう、うう」と呻くことしかできなかった。こうして取り上げられた斧は、無事樵夫の手に戻った。だから人は常から歌を詠めるようにしておくべきである。

本話は、和歌を中心とした和歌説話であると理解され、また、山守に取られた斧が、歌の出来によって持ち主である樵夫の元へと戻る、という話の展開からいって、とくに歌徳説話と呼ばれる話型に属するものとみてよい。⁽²⁾ 本話について、諸注釈書では次のように評釈がなされている。⁽³⁾

① 『宇治拾遺物語』⁽⁴⁾ (日本古典文学全集 波線・傍線共に筆者による。以下同様。)

歌とはありがたい功德をもったものという、いわば歌徳説話の一種。返歌ができず、もごもごする山守がユーモラスである。歌徳説話は室町期の御伽草子にも多く見られ、庶民的発想ともいえるものである。卷三第十一話(筆者注・「藤六事」、卷九第六話(同・「歌読テ被」免罪事)」にもある。

② 『宇治拾遺物語 古本説話集』⁽⁵⁾ (新日本古典文学大系)

しがない木こりの意外な歌才。それを理解できるだけの教養があるらしい山守。ひなびた情景の中に風雅を点じた歌徳説話である。

③ 『宇治拾遺物語』⁽⁶⁾ (新編日本古典文学全集)

山守には、多少の歌詠の心得があったものらしい。それだけに無教養のはずだと、木こりを見くびって意表をつか

れ、返歌に窮する態をさらすことになった。作歌が窮地を救ったという歌徳説話。

④ 『古本説話集全註解』⁽⁷⁾

本こりが山守に手斧を取られたが、歌をよんで返してもらった話で、このように気のきいた歌をよんで人の心を動かす歌の話を歌徳話と名付けている。本集にも歌徳話が何話かある。

本話は『宇治拾遺物語』第四十話（流布本、卷三第八話）、『醒睡笑』卷五に同話がある。特に『宇治拾遺』とは全くの同文である。ただし前にも述べたように本集とは直接の引用関係はなく、散佚文献から別々に両者が引用したと思われる。

話末の「人はただ歌を」以下は読者に対して教訓する一文である。『宇治拾遺』にも同評があるので、本集撰者による独自の批評ではないが、本集の他の話にもこのような批評があるので、撰者も同意見だったと思われる。

以上、①から④までが、諸注釈書における本話の評釈である。この他、先行研究として挙げるべき論考も存するが、それについては順次触れさせていただく。まず前述のとおり、本話の構造は歌によって事態が好転するという、典型的な歌徳説話として理解できるため、波線部にある各注釈書の見解は首肯できる。また、①から④まで、先と同様に施した傍線部からはそれぞれ異なる問題点等を指摘しているながらも、本話を山守と樵夫との間で実際に起きた贈答を基とした説話である、という認識で通底していることを確認できる。しかしこのように解する場合、筆者は疑問を抱く。注釈書②の言葉を借りて具体的にいえば、「しがない本こり」は本当に和歌を詠むことができたのだろうか、という点である。この点について考察するが、それにはまず、諸注釈書が前提としている、山守と樵夫との関係、両者の実態について把握しなければなるまい。

二・樵夫と山守

両者の関係について触れる前に、それぞれがどのような存在であったかを確認しておく。

まず、樵夫についてであるが、中国において、「樵」という漢字は、南朝宋の裴駰^{はいいん}による『史記』の注釈書『史記集解』に、「漢書音義曰、樵取薪也、蘇取草也」とあって、薪を取る者の意と認識されている。日本においても、同意の認識がされており、それは『宇治拾遺物語』成立期から時代は降るが、『日葡辞書』に、「Quon. キコリ（樵）山林で薪を切る者」と記されていることから推察できる。また、本話の樵夫に照合しても問題は生じないから、薪を取る者を指すと見てよい。

山守については、『日本書紀』巻第十、応神五（二七四）年に「五年秋八月庚寅朔壬寅、令諸国、定海人及山守部」とあるのが古い例として挙げられる。⁽¹¹⁾また、『続日本紀』和銅三（七一〇）年二月二十九日には、「庚戌、初充守山戸、令禁伐諸山木」とあって、⁽¹²⁾国有地で許可なく木を伐ることを禁じ、それを監視するために山守を設置したことが推察できる。つまり、樵夫は薪を採ることを生業としており、山守は現在でいうところの入会権を要する山に配置された管理者としての役目を持つ人物ということである。これを勘案して本話に即すと、入会権を要する山において樵夫が薪を採っていたために、山守は樵夫の持つ斧を取り上げた、という構図が推される。

この両者の対立は、事実上でも生じており、本話の先行研究である千本英史氏の論考⁽¹³⁾において以下のように指摘されている。氏が示された事例、摂津国勝尾寺周辺の山林での事を援用しておく。⁽¹⁴⁾

一二三〇（寛喜三）年二月というから、『古本説話集』や『宇治拾遺物語』が編纂されてから、そう後のことではない。勝尾寺の住僧淳空は、寺家訴訟の当事者として奔走するうちに、一つの霊夢を見た。その次第を記した『霊夢記』

という短章が今に残っている。

……其れ、隣村の民俗、斬伐憚ることなく、勝負を争ひて休まざることいかん。山林は日を逐ひて荒蕪す……外人す

(二三九)

ら猶もつて傷嗟す、住侶いかでか悲歎せざらんや。この故に去年十二月十日、住侶等嶺林に入りて禁遏を加ふるところ、樵夫制止に拘わらず寺僧殆ど凌辱に及ぶ。或ひは杖木を加へられて血を流す輩あり。或ひは手足を縛せられて涙を落す者あり。……同月廿七日夜の夢に（以下略、傍線は筆者による）。

なお、千本氏が指摘する『霊夢記』中には、今回の争いを早く治めるよう夢中で告げられる旨が記されているが、引用文中、寺僧に「山守」という表記はない。しかし、先に確認したように、山守は入会権を要する山に配された管理者であつたから、右の騒動を、寺領の山へやってきた樵夫との抗争と捉えれば、ここに登場する僧が寺領を監視する山守的役割を担っていたと理解でき、問題は生じない。また、注目すべきは、傍線部の内容である。右の記述から、樵夫は寺僧らを凌辱し、持っていた杖木によって殴打しており、まさに流血沙汰を起こしたことが推察されて、相当な乱暴者であつたことが分かる。

次に、『梁塵秘抄』にある樵夫の歌を示す。⁽¹⁵⁾

樵夫は恐ろしや 荒けき姿に鎌を持ち 斧を提げ うしろに柴木巻き上るとかやな 前には山守寄せじとて杖を提げ

（新日本古典文学大系 傍線は筆者による）

この歌をもって言わんとするところは、傍線部「山守寄せじとて杖を提げ」という表現が、まさに『霊夢記』に見た樵夫の実態と合致する点である。この歌は、同書にある「不動明王恐ろしや……」の替え歌とされるが、その歌詞に無理矢理当てはめようとした表現でないことは、『霊夢記』から認められる。つまり、『梁塵秘抄』にある右の樵夫の歌は、その実態と山守との対立に基づいて成立した替え歌であると考えてよい。また、流行歌を収める『梁塵秘抄』にこの歌が存す

ることは、同書の成立した院政期に、山守を寄せつけまいとしていた樵夫の実態が広く浸透していたことを推察させる。以上、確認してきたように、一般的に樵夫は薪を採ることを生業とし、かつ粗暴な性格の持ち主であった。そしてその暴力の矛先は、山番として樵夫と反する立場にいる山守へと向けられており、両者は対立していた。また、『梁塵秘抄』にみた樵夫の歌からは、樵夫の実態、山守との関係が共に広く認知されていたことを推察させる。

さて、ここまでの結果から、冒頭に列挙した諸注釈の見解に改めて懐疑的にならざるをえなくなった。本話を樵夫と山守の贈答が伝承された説話とみると、その実際の姿と乖離しており、本話のような雅趣あるものになりえたかどうか。本話と実際の樵夫の振る舞いとの間には距離があるように思う。では、本話には、どのような場が想定できるのだろうか。筆者は、これまで具体的な指摘の挙がらなかった、本話の原説話について考えてみたい。

そこで、本話の和歌へ視点を変え、その背景について探っていく。

なお、和歌への視点は、先行研究である小峯和明氏の論考⁽¹⁷⁾から教示を得たことが多い。氏は本話を出発点として、樵夫の詩歌について考察され、説話と今様の交錯を説いておられる。よって重複する点度々に及ぶが、氏が挙げられたものも含め、関連する詩歌の体系づけを試みる。

三．歌材としての樵夫の伝統

I 漢詩

はじめに、樵夫に関連する漢詩をみていく。

漢詩において樵夫を材に取った例は、菅原道真（八四五〜九〇三年）による①「樵夫」、②「晚嵐」、③「閉菴」の三篇⁽¹⁸⁾が存する。①の詩は、「樵夫」と題してその貧しさを描いたものである。言及すべきは、「樵夫」という題についてで、こ

の題によって一篇を形成しているということは、平安期からすでに樵夫が歌材として取り上げられていたことを意味する。
②、③の詩については、すでに先学諸氏によって指摘がなされているが、大略を述べると、②は自然やそれを描いた調度に触発されて詠じたもので、そこに樵夫が登場している。同様に、③については、六朝時代の志怪小説集『述異記』にある王質の故事を土台としているという指摘が存する。この故事は、晋時代の王質という人物が、囲碁を打つ童子を長く眺めていると、斧の柄が朽ちるほどに時が経っていた、というものである。後述するが、この話は、貴族間に流布していたようで、和歌においても該当故事を踏まえた表現が散見される。

樵夫に関連する漢詩はこれだけではない。道真からやや時代を降る、藤原公任（九六六―一〇四一年）撰『和漢朗詠集』にも次のものが収められている。⁽¹⁹⁾

①『和漢朗詠集』卷上・秋「落葉」

樵蘇往反 杖穿朱買臣之衣

隱逸優遊 履踏葛稚仙之藥

落葉山中踏

相如

②『同書』卷下「山家」

山路日落 滿耳者樵歌牧笛之声

澗戸鳥歸 遮眼者竹煙松霧之色

齊名

①の詩は、平安中期の文人、高丘相如（すけゆき）によるもので、この詩は、樵夫と隱者との対比が成されているものである。この

ように番号例は、紀齊名（九五七～九九九年）撰の漢詩集『扶桑集』卷七「樵隱」にもみえる。⁽²¹⁾ 該当する詩の題は、「樵隱俱在山」であるが、これはすでに田坂順子氏の指摘があるように、『文選』雜詩下にある謝靈運（三八五～四三三年）の「田南樹園、激流植援」と題する詩の首句にあたる。⁽²²⁾ 平安貴族等の必讀書であった『文選』が与えた影響を考えれば、田坂氏が指摘された『扶桑集』「樵隱」のみならず、①『和漢朗詠集』の該当詩も『文選』を摂取した漢詩のひとつとして挙げられる。この他、『文選』中で材に取られている樵夫についてみると、樵夫、つまり「樵」の字が用いられた例は十三例、そのうち「樵蘇」という用例が五例存する。⁽²⁴⁾ このことから、該当詩①にある「樵蘇」も、その表現の背景に『文選』があつた可能性は高く、「樵隱」の例も鑑みれば、①の詩は再度いうが、『文選』の影響を強く受けた詩であると考えられる。

②の詩には、「樵歌牧笛」という句に樵夫が関連する。これも前の例と同様に、中国の影響があるものと推される。具体的には、李白（七〇一～六二年）の古風五九首と呼ばれるうちの五八首目の尾句に、「樵牧徒悲哀」とあつて、⁽²⁵⁾ 樵夫と牧者を番える先例が存しているのである。

ここまで樵夫に関連する漢詩の例をみてきたが、どうやら漢詩文をものした貴族達の意識には、歌材として、たしかに樵夫が存していたと思われる。また、その表現や題には、『文選』や李白といった中国の影響が背景としてあつた。小峯氏の論考においても、樵夫と漢詩の関連に触れておられるが、具体的な背景についての言及はなされていなかった。したがって、本稿における、樵夫と漢詩の関連が中国の表現に由来するという結果をもって、氏の説を僅かながらも補強できたと考える。

II 和歌

続いて、樵夫に関連する和歌についてみていく。樵夫に関連する和歌を表現や用語に注目して大別すると、主として以下の三点によって区別できる（なお、小峯氏も前掲論考中に樵夫の和歌について触れており、引用部に重複がみられるが、体系づけを試みるために再度論じていくこととする）。

A 木こり、木こる／B 斧／C 薪

いずれも薪を採ることを目的とした樵夫に関連している語であるが、もちろんAからCに当てはまらない和歌も存する。それらの和歌については後述するとして、ひとまずAの表現から順に触れていく。

A 木こり、木こる

言うまでもなく、樵夫は薪を採るために木を伐る。和歌においてそれが表現される場合の例を次に挙げる。⁽²⁶⁾

①『貫之集』「恋」

644 なげきこる山とわが身はなりぬれば心のみこそいとなかりけれ

②『古今和歌六帖』第一・天「霞」

（よみ人しらず）

614 山がつのなげきこりつむいほりには霞やきつつけぶりともなる

③『兼盛集』恋歌

53 足引の山の梯ひさしくもなげきこりつつわたりぬるかな

④『相模集』「中の冬」

274 あさけしていであつるいもをまつほどはなげきこりつむをののすみやき

右の①から④は、傍線で示したように、「なげきこり（る）」という表現で共通する。①と③の例は、恋部に属する歌で、火に投げ入れる木、「投げ木」と、思いを抱く相手に対する「嘆き」とが掛詞になっている。「こる」は、漢字を当てれば「伐る」であり、木を切ることを指す。つまり、「なげきこりつむ」は、なげき（投げ木・嘆き）を積むことを指し、意味としては、投げ木を積むことと、積むようにして嘆くという思いを幾度となく抱くことを掛けている。

②、④の例は、その部立名から推し量るに、自然の情景を読んだ歌の表現として、「なげきこり（る）」が存していたと思われる。これはI漢詩の中で挙げた道真の②「晚嵐」にも指摘でき、樵夫を自然の情景の中に織り交ぜるといふ漢詩の表現を承けているものとも解せる。

また一方で、このような表現も存する。

①『業平集』

世中を思ひうじて

78 すみわびぬ今はかぎりと山ざとにつま木こるべきやどもとめてむ

②『頼政集』

逢樵夫問花の心を歌林苑人人読み侍りしに

66 をりえたる妻木こるをに物まうす彼峰なるは雲か桜か

③『拾遺愚草』（定家）

殷富門院皇后宮と申しし時、まゐりて侍りしに、

権亮大輔などさぶらひて、夕花といふことをよみしに

2166 つま木こりかへる山ぢのさくら花あたらしをゆくてにやみる

右に挙げた例は、傍線を施したように、「つま木こり（る）」という表現で共通した歌である。「つま木」は薪として使うような小枝のことを指し、「なげきこり（る）」と同様に、木を伐る樵夫の姿が表現されている。別表として、樵夫歌群一覽表を掲げたが、『新編国歌大観』中、「きこり（る）」という表現は五三首存し、そのうち四四首を今見てきた二つの表現が占める。このことから、樵夫は歌材として主となるものではないものの、確かに貴族等に意識された材の一つであったということが出来る。蛇足ながら、「なげきこり」という表現が、院政期を境として、「つま木こり」という表現に推移していくことも別表から指摘できる。

B 斧

樵夫が木を伐るために使用する斧が、和歌に取り入れられるとき、次に示すような表現が主として挙げられる。

①『古今和歌集』卷十八・雑下

つくしに侍りける時にまかりかよひつつこうちける人

のもとに、京にかへりまうできてつかはしける　きのものり

991　ふるさとは見しごとあらずをのえのくちし所ぞこひしかりける

②『後撰和歌集』卷二十・慶賀・哀傷

院の殿上にて、宮の御方より碁盤いださせたまひける

ごいしけのふたに

命婦いさぎよき子

1383　をのえのくちむもしろず君が世のつきんかぎりはうちこころみよ

①、②のように、斧を和歌に取り入れた場合、「斧の柄が朽ちる」という表現がなされる。さらに、①、②の詞書から、「囲碁」との関連が強く、漢詩の場合と同様、王質の故事に依拠していることが推察できる。

そして、後掲別表を参照すると、「斧」を読み込んだ歌は四三首存し、このうち三七首が、「斧の柄が朽つ」という表現を用いている。この結果は、それだけ貴族間に流布していた故事であったことを意味する。小峯氏も指摘しておられるように、この故事の概要が、源俊賴（一〇五五―一二二九？年）の歌字書『俊賴髓脳』にみられるのも、その流布の一端を示すが、つまり、「斧の柄が朽つ」という表現によって、和歌の享受者達には、王質の故事が想起され、ほんの短い間と、思っても長い年月を過ごしていたという意に変換し、歌意を汲み取っていたのではないかと推察する。王質の故事は、それほど人口に膾炙した話であった。

C 薪

次に、「薪」が歌語として用いられた場合についてみていく。結論からいって、薪が和歌の材となるとき、各和歌集の注釈書等においても触れられているように、『法華経』にある文言と関連する。

まず、該当する和歌を示すと以下のとおりである。

①『拾遺和歌集』卷二十・哀傷

大僧正行基よみたまひける

（行基）

1346 法華経をわがえし事はたき木こりなつみ水くみつかへてぞえし

②『後拾遺和歌集』卷十・哀傷

二月十五日のことにやありけんかの宮の

さうそののち、さがみがもとにつかはしける (小侍従命婦)

546 いにしへのたきぎもけふのきみがよもつきはてぬるをみるぞかなしき

③『金葉和歌集』巻十・雑部下

提婆品の心をよめる

瞻西上人

627 のりのためになふ薪にことよせてやがてうきよをこりぞはてぬる

④『統詞花和歌集』(藤原清輔撰)

かまくらの涅槃会にまゐりてよめる 成尋法師

470 かなしさと薪つきけんそのひとぞむかしに今もかはらざりける

引用した①から④の和歌のうち、②には、「たきぎも……つきはてぬる」、④には、「薪つき」とあって、どちらも「薪尽く」という表現で一致している。これは、『法華経』序品第一にある、「仏此夜滅度 如薪尽火滅」⁽²⁸⁾という釈迦入滅の際の句を踏まえたものと推察される。詞書にもそれぞれ、②「二月十五日のことにやありけん」、④「涅槃会にまゐりてよめる」とあって、釈迦入滅の日とそれに関わる法要を想起させる。「薪尽く」という表現と『法華経』、仏教儀式との関連性は切り離せない。

また、①の和歌には、「法華経を我がえしこと」、③には「のり(法)のため」とみえ、これらと薪の関連は、該歌の注釈等ですでに指摘があるように、『法華経』提婆達多品第十二に由来する。本文は引用しないが、内容が簡単に触れておくと、釈迦が前世で大王であったとき、法華経の教えを乞うため仙人に仕え、薪を拾い、菜を摘み、水を汲むことが修行の一環としてあった、というものである。それが③の歌に表出していることは、「たき木こり……」以下の句をみれば明らかであるし、④はその詞書からして、いわゆる釈教歌の類と考えられる。

したがって、①、③も經典との関連が深い。とくに①に関しては、これも多く指摘がなされているが、法華八講のいわゆる「薪の行道」において唱和された歌であるとされる。⁽³⁰⁾經典だけでなく、いやむしろ、法華八講のような仏教儀式によって、和歌における「薪」の表現は貴族等に浸透していったと推察しても過言ではない。⁽³¹⁾

以上、樵夫に関連する語を取り入れた和歌の表現について確認してきた。B、Cに属する和歌は、貴族等に樵夫が歌材として意識されていたというよりも、むしろ、中国故事、『法華経』、あるいは仏教儀式の影響によって、その表現が浸透していったと認識すべきである。翻って、Aの類型歌は、自然の景物を詠じる詩の中に登場させるという漢詩の表現を承けつつも、「なげきこる」という掛詞の例にみられるように、仮名文字を有する国ならではの工夫が遂げられているのである。このように樵夫を歌材とする意識は、後掲別表によっても鮮明に看取できると考える。

次に、いまみてきたような類型には属さないが、貴族等の意識を探る上で参考となる例について触れておく。

①『嘉言集』

おなじゑに、きこり、桜のしたにやすむ心を

13 ここにこそしばしなりともとどまらめおなじやすみを花のあたりに

②『和泉式部集』

ゑに山寺法師のゐたる所に、きこりとかやのかへる所に

115 すみかぞとおもふもかなしくるしきをこりつつ人の帰る山辺に

①は、大江嘉言（?～一〇一〇年）の自撰歌集とされる『嘉言集』、②は、同じく私家集『和泉式部集』からの引用である。注目すべきは両歌とも詞書に「ゑ」とあるように、樵夫の描かれた屏風、ないしはそれに類するものに対して歌が詠まれているという点である。つまり、右の屏風歌の例は、やはり平安貴族達の歌材として樵夫が認知されていたことを

示している。

ここまで、和歌において、樵夫がどのように撰取されてきたのか、粗々考察してきたが、その結果、和歌において、樵夫は「木こり（る）」といった表現や中国故事、經典との関連も相俟って、決して歌材として主流なものではないものの、貴族達の意識の中に確実に存していたといえる。

さて、詩歌において樵夫がどのように表現され、認識されているのかを確認し、考察を加えてきた。その結果、第一に、歌材としての樵夫の源流は中国にあったといえる。そして、その流れは『文選』と共に日本へ渡り、道真をはじめとする漢詩文に長けた貴族等に受容された。漢詩の材としての樵夫は、『和漢朗詠集』を撰じた公任の時代に引き継がれていく一方で、漢詩から和歌の方面でも意識されていく。さらに、樵夫への意識は、中国故事や法華八講といったものと関連しながら浸透していったと考えられる。そして、院政期以後、樵夫は歌材として、ときには『梁塵秘抄』の、「樵夫は恐ろしや……」といった歌謡となった。また、『六百番歌合』『樵夫寄恋』という歌題としても、さらに『七十一番職人歌合』の職種の一つにも数えられ、広く盛行していった。つまり、中国から入ってきた意識が頂となり、漢詩から和歌へと、その流れは時代とともに降り、高山から平地へと扇状に流れる、まさに水脈のような広まりをみせたのではないかと推察する。ここまでの推察を踏まえ、次に『宇治拾遺物語』中の本話がどのような場から伝承されたのかについて考える。

四．第四十話の場——まとめに代えて——

本話の成立にはどのような場が想定でき得るか。本話の和歌について改めて確認しておく。

あしきだになきはわりなき世の中によきをとられて我いかにせん

この和歌の特徴は、冒頭に挙げた『宇治拾遺物語』の注釈書等で触れられているように、「よき」という表現にある。

具体的には、「あ(悪)しき」に対する「よ(善)き」であり、また「よき(斧)」をとられて」という意でもある、つまり「善き」と「斧」との掛詞である。このように「よき(斧)」を連想させる和歌は本話独自のものではなく、先例が存する。

①『後撰和歌集』卷十四・恋六

女に物いはんとてきたりけれど、こと人に

物いひければ、かへりて

1042 わがためにかつはつらしと見山木のこりともこりぬかかるこひせじ

返し

1043 あふごなき身とはしるしる恋すとて歎こりつむ人はよきかは

②『金葉和歌集』卷三・秋部

深山紅葉といへる事をよめる 大納言経信

246 やまもりよをのをとたくきこゆなりみねのもみちはよきてきらせよ

③『同書』卷八・恋部下

(題しらず)

(よみ人しらず)

499 はかるめることのよきのみおほかればそらなげきをばこるにやあるらん

①は、男女による贈答歌で、女の返歌に「善き」と「斧」とが掛けられている。②は、源経信(一〇一六―一一〇九年)によるもので、「避きて伐らせよ」に「斧」が縁語として用いられている。③の恋歌は、「なげきをばこる」という表現から推して、「よき」に「善き」と「斧」が掛けられている表現だといえる。つまり、本話の和歌は、身分の低い樵夫とは

対照的な宮廷貴族の作風を承けていることになる。

これらと同様な表現を施した、いわば貴族と同じ水準の和歌を、はたして樵夫は即座に詠めたものか。そもそも本話には、実際に樵夫が詠んだのか否かを判別しうる情報が少ないが、筆者はここまでに、史実にみる樵夫が乱暴狼藉をはたっていたこと、樵夫を材とする詩歌の伝統、さらに右の①から③にみえる該歌の先例を示してきた。すると、冒頭で確認した諸注釈の解釈には、未だ余地が残されていないか。ここまでの結果を鑑みると、樵夫を歌材として受容していた貴族の詠が伝承されるうち、次第に彼等の姿は消え、さも樵夫の詠のように形を変えた可能性は考えられないだろうか。

反論としてはなお、粗暴な樵夫の中に本話のような歌才に恵まれた樵夫が存した、という異聞性によって伝承された説話だと想定する向きもあるが、そこでこの問題について、樵夫が和歌を詠むという点で共通する『宇治拾遺物語』第一四七話「樵夫小童、隱題歌読事」(卷十二ノ十一)を例にとつて本話と比べてみよう。次に該話の一部を挙げる。⁽³²⁾

今は昔、隱題^{かくしだい}をいみじく興せさせ給ける御門の、ひちりきを読ませられけるに、人／＼わろく読みたりけるに、

木こる童の、曉、山へ行とていひける(後略)

(新日本古典文学大系)

この後、樵夫の小童は見事「ひちりき(筆簾)」の隱題歌を詠むのであるが、引用した説話冒頭部を本話と比べてみると、情報量に差のあることが分かる。本話では、樵夫が山守に斧を取り挙げられ、思案に暮れていた、とあるだけであるが、右の説話では、いつ頃、どういった時、どのような状況で、どんな樵夫が和歌を詠んだのか、より多くのことを伝えようとする痕跡が看取できる。つまり、樵夫が和歌を詠む点で等しい二つの説話を比べてみると、どのような状況であったかを語る姿勢は第一四七話の方が富んでおり、本話はその異聞性ともいふべき性格に乏しい説話であると推察する。したがって、本話が歌才に恵まれた樵夫の姿を伝える話である可能性は低いと考える。なお、岡田美也子氏は『宇治拾遺物語』中の樵夫説話、とくに「瘤取り爺」の話で有名な第三話を中心に論を展開し、そこに天台座主慈円の人物像が重なることを指摘

しておられるが、氏の本話に対する見解は、本稿のように、説話の場を問題にしていない。また、論の大部が第三話に関わり、編者論にも及ぶため、本稿の論旨とはずれる。そこで、岡田氏の論考については、稿を改めて触れ、検討を行う。

さて、本話が異聞性の乏しい説話だとすれば、いったいどのような性格を有するのか。次に示す例は、その点を考えるうえで看過できない事例である。

①『後撰和歌集』卷十一・恋三

まもりおきて侍りけるをとこの心かはりにければ

そのまもりを返しやるとて これひらの朝臣のむすめいまき

761 世とともになげきこりつむ身にしあればなぞやまもりのあるかひもなき

②『好忠集』「恋」

559 もるやまになげきこる身は音もせでけぶりもたたぬおもひをぞたく

①、②共に、先にみた「なげきこり（る）」の表現であることには変わらないが、注目すべきはその語に続く「身」という表現である。新日本古典文学大系等の注釈書を参考にすると、①は男の心変わりを嘆く女の恋歌で、その嘆きを積む我が身を、投げ木を積む樵夫に見立てた歌、②も思う人への恋情を何か行動で示すわけでもなく、ただ胸中で燃やしているという意を、投げ木を伐り、煙の立たない「おもひ（火）」を焚く樵夫に見立てた歌と理解される。これらの例から、貴族達が詠む見立て歌の選択肢として樵夫が存していたことを確認できる。さらに、『宇津保物語』「菊の宴」にみられる一場面を引く。⁽³⁴⁾

③『宇津保物語』「菊の宴」

かくて、さうはちのものの調べばかり、ものの音ども、同じ声に整へて遊びす。歌仕うまつりなどするほどに、藤中

將、源中將など、声たぐひなし。「もの奉る人を片去りて奉れ。そのなにがし、面を」といふ。式部卿の親王、「源中將の朝臣、何の才か侍る」。(中略)。「樵夫の才なむ侍る。人にあらずのみや」。

(以下略)

この場面は、「遊びす」とあるから、貴族達が遊びをしていることは容易に想像がつく。新編日本古典文学全集『宇津保物語』の頭注は、この遊びが「才名のり」というものであって、それは、「神楽で採物の後に行われる物まねのような余興」と解説している。⁽³⁵⁾これは、樵夫が余興の場で引き合いに出されていた、ということを示す一例証となる。

筆者は、先にここまでの結果に基づき、本話の和歌がそもそも貴族の詠であった可能性を指摘したが、いま示した、樵夫の見立て歌や貴族の余興に樵夫が引き合いに出される、といった例が、やはり本話の原説話に貴族の影を想起させる。つまり、右の①から③に似たような場で引き合いに出された樵夫が、伝承とともに本物の樵夫のように姿を変えていったと考えさせる。同じく樵夫の名がみえる第一四七話と比べて異聞性が乏しいのも、本話が実際の樵夫によるものでなく、貴族の場から伝承された歌語的性格を有しているためだと推察する。したがって、本話は、歌語りが起こりうる貴族の場を淵源に伝承された説話であると考ええる。

以上、『宇治拾遺物語』第四十話にみえる和歌に注目し、その説話の源泉について考察した。ただし、いうまでもなく、本話以外の樵夫にまつわる伝承や詩歌の全てに触れることはできていない。また、別表に示した詩歌や引用した第一四七話のような説話にも筆者の論を当てはめようというでもない。本稿では、冒頭に列挙したように、これまで実際の樵夫が詠んだ、との解釈のみであった本話を取り上げ、別の解釈の余地が存することを示した。それは、詩歌管絃を専らとした貴族達の営みに求められる。今後は、その可能性も視野に入れながら他の樵夫の伝承を追究していく。本稿はまだその端緒に過ぎない。

〔註〕

(1) 『宇治拾遺物語 古本説話集』新日本古典文学大系 三木紀人 浅見和彦 中村義雄 小内一明 校注 岩波書店 一九九〇年一月二〇日 八五頁。

(2) 久保田淳氏は、「和歌説話の系譜」『日本の説話』第4巻 中世Ⅱ 市古貞次 大島建彦 編 東京美術 一九七四年 一七〇(三八頁)の中で、「すなわち、誰かが或る条件(状況)の下でこれこれの和歌を詠んだ、そしてその結果、状況がこのようになつたというものである。この場合、詠まれた和歌は何らかの点ですぐれており、そのような和歌を詠んだ結果、詠み手やその周辺の置かれていた状況が好転することが多い。それゆえ、これらは大体において名歌説話、歌徳説話と呼ぶことができる」と定義している。また、森山茂氏は、「歌徳説話の伝承について——歌徳説話論 その一——」『尾道短期大学研究紀要』24巻 一九七五年 一〇二(頁)の中で、「歌徳説話は、和歌を詠ずる行為が、もしくは、詠じられた和歌が、なんらかの徳を発揮し、あるいは、それによって、歌人が、なんらかの徳を得る、ということを中心とする説話である」と定義している。

(3) 本文で挙げた①から④の他に、『宇治拾遺物語・打聞集全註解』(中島悦次著 有精堂 一九七〇年二月二〇日)、『宇治拾遺物語』(新潮日本古典集成 大島建彦校注 新潮社 一九八五年九月一〇日)が本話を評釈しているが、本話についての具体的な指摘ではないため、本稿では省略した。

(4) 『宇治拾遺物語』日本古典文学全集 小林智昭校注・訳 小学館 一九六三年六月三〇日 一四五頁。

(5) 注(一)に同じ。

(6) 『宇治拾遺物語』新編日本古典文学全集 小林保治 増古和子校注・訳 小学館 一九九六年 七月一〇日 一一八頁。

(7) 『古本説話集全註解』高橋貞著 有精堂 一九八五年八月一日 一〇六—一〇七頁。

(8) 本話を取り上げた論考に、千本英史氏「樵夫 vs. 山守の事」と小峯和明氏「木こりの歌——今様と説話」がある。詳しくは注(13)、注(17)に記した。

(9) 『印影文淵閣四庫全書』246冊史部四 正史類 一七九頁上段。

(10) 『邦訳日葡辞書』土井忠生 森田武 長南実 編訳 岩波書店 一九八〇年五月二九日 四九四頁。

(11) 『日本書紀 上』日本古典文学大系 坂本太郎 家永三郎 井上光貞 大野晋校注 岩波書店 一九六七年三月三十一日 三六四—三六五頁。

- (12) 『続日本紀 一』新日本古典文学大系 青木和夫 稲岡耕二 笹山晴生 白藤禮幸校注 岩波書店 一九八九年三月二〇日
一六〇～一六一頁。
- (13) 「樵夫 vs. 山守の事」『日本文学』第39巻 一九九〇年四月 五六～六〇頁
- (14) 注(13)、五七頁。
- (15) 『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』新日本古典文学大系 小林芳規 武石彰夫 土井洋一 真鍋昌弘 橋本朝生 校注 岩波書店 一九九三年六月二日 一一二頁。
- (16) 注(15) 一一三頁。注(17) の小峯氏論考、新編日本古典文学全集も同様の立場を採る。なお、二つの歌謡を比較すると次のようになり、確かに類似性を指摘できる。
- 399 樵夫は 恐ろしや 荒けき姿に鎌を持ち 斧を提げ うしろに柴木巻い上るとかやな 前には山守寄せじとて杖を提げ
284 不動明王恐ろしや 怒れる姿に剣を持ち 索を下げ うしろに火焰燃え上るとかやな 前には悪魔寄せじとて降魔の相
- (17) 「木こりの歌——今様と説話」〔説話の声——中世世界の語り・うた・笑い〕小峯和明著 新曜社 二〇〇〇年六月二〇日
二一〇～二三九頁
- (18) 本文については、それぞれ『菅家文章 菅家後集』(日本古典文学大系 川口久雄校注 岩波書店 一九九六年一〇月) 二二六頁、二三八～二三九頁、四二八～四二九頁を参照されたい。
- (19) ②は、注(18) 『菅家文章 菅家後集』六七九頁の補説に指摘がある。③については、注(17) 小峯氏論考、注(18) 該歌頭注ほか、各注釈書等に指摘がなされている。
- (20) 『和漢朗詠集』新編日本古典文学全集 菅野禮行校注・訳 小学館 一九九九年一〇月二〇日。
- (21) 『群書類従』第八輯 装束部・文筆部(塙保己一編纂 平文社 一九三二年一〇月一五日) 一五八頁。
- (22) 田坂順子氏『扶桑集』全注釈(三)〔福岡大学総合研究所報〕第152号 一九九三年九月二〇日 一五～二八頁。
- (23) 『文選(下)』(新釈漢文大系第15巻 内田泉之助 網祐次共著 明治書院 一九六四年二月一〇日 六三七～六三九頁)による。
- (24) 『唐代研究のしおり 特集第三 文選索引』第三冊 斯波六郎編 昭榮堂 一九五九年五月三〇日 一七二四頁。
- (25) 『李太白詩歌全解』(大野實之助著 早稲田大学出版部 一九八〇年五月一〇日 九九三頁)による。

(26) これ以後の和歌本文は、注記のない限りすべて『新編国歌大観』による。

(27) 『歌論書』新編日本古典文学全集 橋本不美男 有吉保 藤平春男校注・訳 小学館 二〇〇二年一月 一八三～一八四頁。

(28) 『法華経』上(佛典講座7 田村芳朗 藤井教公共著 大蔵出版 一九八八年三月三〇日)による。原文は九六頁、書き下しは九九頁。

(29) 『法華経』下(佛典講座7 藤井教公 大蔵出版 一九九二年九月二〇日、六一九頁～六二〇頁、六二二頁を参照されたい。

(30) 該歌の注釈をはじめ、三角洋一氏「和歌と仏教」(『源氏物語と天台浄土教』所収 若草書房 一九九六年一〇月)や新間進一氏による『金沢文庫資料全書』第七卷(神奈川県立金沢文庫編 一九八四年三月)「歌謡・声明篇」(二九三～二九八頁の解説、磯水絵先生の「枕草子」の音楽表現——「奈良方」と「法華八講」を中心に——)、『源氏物語』時代の音楽研究——中世の楽書から——』所収 笠間書院 二〇〇八年二月)に指摘がみられる。

(31) 今回は紙幅の都合上、表の形にはできないが、薪を歌語とした和歌を、別表のごとく『新編国歌大観』中に求めると、三十首存し、うち十九首が『法華経』を連想させ、その外十一首は、景物としての「薪」であった。やはり、『法華経』との関連が強いとみてよいだろう。

(32) 注(1)三〇三頁。

(33) 『宇治拾遺物語』樵夫説話と慈円——第三話を起点として『千葉敬愛短期大学紀要』23巻 二〇〇一年二月 一～一八頁。

(34) 『うつほ物語②』新編日本古典文学全集 中野幸一校注・訳 小学館 二〇〇一年五月二〇日 三二～三二頁。

(35) 注(34)三二頁。

別表 樵夫歌群一覧表

・『新編国歌大観』より、樵夫に関連する語が読み込まれた歌を抽出し、関連語ごとに表にしたものである。

・便宜を図り通し番号とし、詠者の生没年を軸としながら、作品自体の成立年を勘案した年代順とする。

・その際の生没年、成立年については、『新編国歌大観』巻末記載の解題や事典類等を用いて概ね定説となる説を採る。

・和歌中の仮名・漢字表記は私に改めた。

・機械的に検索をした感が拭えないことや、『私家集大成』他からの増補の必要性が問題となるが、これらは今後の課題としたい。

関連語（きこり）

番号	作品名 （推定成立年）	詠者 （推定生没年）	和歌	備考
1	万葉集 （成立年未詳）	よみ人しらず	をのとりてにふのひやまのきこりきていかだにつくり……	卷十三 挽歌
2	後撰和歌集 （九五一年）	伊衡朝臣女今君 （生没年未詳）	世とともになげきこりつむ身にもあればなぞ山守のあるかひもなき	卷十一・恋三
3		よみ人しらず	あふごなき身とは知る知る恋すとして歎きこりつむ人はよきかは	卷十四・恋六 男女の贈答歌における女の返歌
4	古今和歌六帖 （九七六～八二年頃か）	よみ人しらず	山がつのなげきこりつむ庵には霞やきつつ煙ともなる	第一「天」霞
5	兼盛集 （？～九九〇）	平兼盛 （九〇八～九九〇？）	足引の山の梯ひさしくもなげきこりつつわたりぬるかな	恋歌
6	賀茂保憲女集 （九九三年頃か）	賀茂保憲女 （生没年未詳）	我がごとくよぶかきなげきするとの声にやなげきこりてゆくらん	（雑）
7	嘉言集 （成立年未詳）	大江嘉言 （？～一〇一〇）	ここにこそしばしなりともとどまらめ同じやすみを花のあたりに	屏風歌 詞書「おなじゑに、きこり、桜のしたにやすむ心を」
8	和泉式部集 （成立年未詳）	和泉式部 （九七六頃？）	すみかぞとおもふもかなしくるしきをこりつつ人の帰る山辺に	屏風歌 詞書「ゑに、山寺はふしのあたる所に、きこりとかやのかへる所に」
9	相模集	相模	あさけしていであるいもをまつほどはなげきこりおののすみやき	「なかの冬」

20	隆信集 (一一八二～一二〇四年)	藤原隆信(一一四二～一二〇五)	あさましや心をしるる山人も身におふほどのなげきをぞこる	詞書「きこりに寄する恋」『六 百番歌合』1186番歌(二句異同有)
19	六百番歌合 (一一九三年)	寂蓮(一二三九?～一二〇二)	あきかけてつま木こりつむ山人もゆる思ひの程はしらじな	二三番
18	月詠和歌集 (一一八二年頃)	高倉院 (一二六一～八二)	けさよりはいとど思ひをたきましてなげきこりつむ坂の山	巻六・恋下「後朝の心」『新 古今和歌集』卷十三・恋三
17	和歌童蒙抄 (一一四五～五四四年頃か)	よみ人しらず	とぶさたて足柄山にふなきこり君かへりぬとあたらふなきを	山の部
16	和歌一字抄 (一一五一～五四四年頃)	よみ人しらず	妻木こりかへるしづをにことづてて今夜は花の下に宿らん	上「暮」花下日暮
15	和歌一字抄 (一一五一～五四四年頃)	よみ人しらず	ゆふ露にあさの狭衣そほちつつ冬木こりおく小野の里人	上「深」山路露深
14	行尊大僧正集 (一〇八四～九四年頃か)	行尊(一〇五五～一 一三五)	なにごとにこりはてにける花ならんはかなくちるはむかしならひを	詞書「寺へまかるみちに、 木こりどもの…(略)」
13	堀河百首 (一一〇五年頃)	藤原公実(一一〇五三 ～一一〇七)	としをへて爪木こりくべ炭竈に煙をたえぬおほ原の里	冬十五首「炭がま」
12	散木奇歌集 (一二二七年頃)	源俊頼(一〇五五～ 一二二八頃か)	われが身はなげきこりけるこけぎをやはきあつめつつ人となしけん	第九・雑部上
11	好忠集 (一〇八六～一二二六頃)	曾祢好忠 (生没年未詳)	春山にきこる木こりの腰にさすよきつつきれや花のあたりは	「(二月)中」
10	(成立年未詳)	(生没年未詳)	古はなげきこりつつすぎにけり今はなにかは思ひこがるる	「おもひ」

関連語〈きこる〉

番号	作品名 (推定成立年)	詠者 (推定生没年)	和歌	備考
28	興風集 (成立年未詳)	藤原興風 (生没年未詳)	なげきこるをのひびきのきこえぬは山のやまびこいつちにしぞ	42番歌
27	業平集 (成立年未詳)	在原業平 (八二五〜八〇〇)	すみわびぬ今はかきりと山ざとにつま木こるべきやどとめてむ	詞書「世中を思懐して」後撰和歌集 卷十五雑一「古今和歌六帖」第二 「山」山きと「伊勢物語」五九段

26	明日香井和歌集 (一二一九四年頃)	藤原雅経(一二七〇 〜一二二一)	浦ちかき山路にもまたなれにけりしほきこりつむ里のあま入	百日歌合「塩木」
25	拾遺愚草 (一二一六〜三三年頃か)	藤原定家(一二六一 〜一二四一頃)	つま木こり道ふみならず山人もこのゆふ霧や猶迷ふらん	「秋」
24			つま木こりかへる山路のさくら花あたらし匂をゆくてにやみる	「春」詞書「(中略)夕花 といふことをよみしに」
23	物語二百番歌合 (一二〇六年以前)	太皇太后宮御匣殿 (生没年未詳)	なげきこり道まどひける山人のゆくてにかかるものを思ふよ	三八番
22	正治初度百首 (一二〇〇年)	前斎院 (生没年未詳)	我が宿は妻木こりゆく山がつのしばしばかよふ跡ばかりして	「山家」
21		藤原経家(一二四九 〜一二〇九)	した柴の枯行ほどになりぬればつま木こりつむしがらきの里	「山家」

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
(一一〇五年頃) 堀河百首	散木奇歌集 (一一二七年頃)	大式高遠集 (成立年未詳)	好忠集 (一〇八六〜一二六頃)	賀茂保憲女集 (九九三年頃か)	賀茂保憲女集 (九九三年頃か)	貫之集 (成立年未詳)	伊勢集 (成立年未詳)	古今和歌集 (九〇五年)	大輔 (生没年未詳)
藤原基俊 (一〇六〇 〜一一四二)	肥後 (皇后宮女房) (生没年未詳)	源俊賴 (一〇五五〜 一一二八頃か)	藤原高遠 (九四九〜一〇一三)	曾祢好忠 (生没年未詳)	賀茂保憲女 (生没年未詳)	紀貫之 (?〜九四六)	伊勢 (生没年未詳)		
つま木こるかくれ家にする山里にいかでか月のたづねきつらん	爪木こるをのの山へは霧こめて柴つみ車道やまとへる	尋ねてもみやましりをぞさそふべきなげきこるにはみちまどふなり	しばきこるかまどとやまのうぐひすのこゑききふるす人やたれそも	もるやまになげきこる身は音もせでけぶりもたたぬおもひをぞたく	やま人のあしのうへしもきえかへり道にわぶれてなげきこるらん	なげきこる山とわが身はなりぬれば心のみこそいとなかりけれ	なげきこる山路は人もしらなくにわが心のみつねにゆくらん	わがためになげきこるともしらなくになにに蔵をたきてつけまし	なげきこる山としたかくなりぬればつらづゑのみぞまづつかれける
雑「山家」	秋「霧」	第六・悲嘆部	詞書「家のみかしぎの、きこりにやたりけるに、うぐひすの、すくひたりけるきの枝ありけるをたてまつれるを見て」	「恋」	(冬)	「恋」	「恋」「拾遺和歌集」卷十五・恋五 (詠者藤原有時)	詞書「わらびを人にやる」と「古今和歌六帖」第六「草」わらび	卷十九・雑体

49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39
	正治初度百首 (一二〇〇年)		六百番歌合 (一二九三年)		後鳥羽院御集 (一二三九年以後)		寂法師集 (成立年未詳)	林葉和歌集 (一二七八年)	頼政集 (成立年未詳)	為忠家初度百首 (一二三四年頃)
	讃岐(二条院女房) (生没年未詳)	藤原隆房(一一四八 〜一二〇九)	藤原忠良(一二六四 〜一二二五)		後鳥羽院(一一八〇 〜一二三九)		寂蓮(一一三九〜 一二〇二)	俊恵(一二一三〜 一九二)	源頼政(一一〇四〜 一一七九)	藤原忠成(一〇九一 〜一一五八)
	つま木こるわが通路のほかにも又人も問ひこぬ谷の岩ばし	山ふかみ跡たえはつるすまひかなつま木こるをがかよふばかりぞ	妻木こるたかねの霜をうちらはひ山ちにまよふ夕ぐれ空	やまふかみなげきこるをのおのれのみくるしくまどふ恋のみちかな	妻木こる谷の北かせふきかへてけふより春と人にしらるる	すみわびて妻木こるべきやどならばさびしさのみはなげかさらし	鳥かへる谷のとほそに雪ふかし妻木こるをのみちやたえなん	つま木こる跡もむかしになりねとやよし野の宮の今朝のはつ雪	をりえたる妻木こるをに物まうす彼峰なるは雲か桜か	ふなきこるますらをやいまかへるらんに風さむみこまいばゆなり
	「山家」	「山家」	「冬」	二四番	同月(筆者注・一二〇四年 十二月) 住吉三十首御会春 百首	詠五百首和歌のうち雑 百首	外宮御百首のうち冬十 五首	「故郷初雪」	「雪埋樵路歌林苑」第 四冬歌	雑「谷風」 詞書「蓬樵夫閑花といふ心を、歌 林苑にて人々よみ侍りしに」春部

関連語〈斧〉

番号	作品名 (推定成立年)	詠者 (推定生没年)	和歌	備考
54	万葉集 (成立年未詳)	よみ人しらず	みぬさとり みわのはふりがいはふすぎはら たききこり……	巻第七旋頭歌
55		よみ人しらず	をのとりて にふのひやまの きこりきて ふねにつくりて……	巻第十三雑歌
56		よみ人しらず	はしたての くまきのやらに しらきをの おとしいるるわし……	巻第十六能登国歌
57	新撰万葉集 (八九三年頃か)	よみ人しらず	せいようのけいきてんちにひとし……	下巻・春歌二十一首

50	正治後度百首 (一二〇〇年)	源家長(一二七〇) 一二三四	妻木こるしづがあさけの煙ゆゑまだよをこめてひましらむなり	「暁」
51	新古今和歌集 (一二〇五年)	赤染衛門(九五六?) 一〇四一?	なげきこる身は山ながらすぐせかしうきよの中になにかへるらん	巻十七・雑歌中
52		藤原俊成(一一一四) 一一〇四	今はとてつま木こるべきやどの松千代ををば君と猶いのるかな	卷十七・雑歌中 建仁三(一一一三)年 七月五日八幡宮撰歌合本歌は『後撰和歌集』卷十五・雑・業平の歌
53	拾遺愚草員外 (一二三七年以後)	藤原定家(一一六二) 一二二四	つま木こるやどともなしにすみはつるおのが心ぞ身をかくしける	『白氏文集』第八の句 を材とす

66	65	64	63	62	61	60	59	58
後撰和歌集 (九五一年)	一条摂政御集 (九九二年以後)	海人手古良集 (成立年末詳)	九条右大臣集 (九六〇年以後か)	元輔集 (九八六年以前)	伊勢集 (成立年末詳)	兼輔集 (成立年末詳)	古今和歌集 (九〇五年)	亭子院女郎花合 (八九八年)
命婦いさぎよき子 (生没年末詳)	藤原伊尹の北の方か (生没年末詳)	藤原師氏 (九一三〜九七〇)	藤原師輔 (九〇八〜九六〇)	清原元輔 (九〇八〜九九〇)	伊勢 (八七二?〜九三九?)	藤原兼輔 (八七七〜九三三)	紀友則 (八四五〜九〇七)	よみ人しらず
をののえのくちむしらず君が世のつきんかぎりはうちこころみよ	ももしきはをのえたくす山なれやいりにし人のおとづれもせぬ	をのえを手ならしそめぬ君なれば何をかくたすなにはくたさん	をのえはくちなば又もすげかへんうき世中にかへらずもがな	君がひく子日の松はくちめやはいざをのえにすげてたのまん	をののえのくつばかりにはあらねどもかへりみだにもみる人のなさ	をののえもくちやしぬらん逢ふことの世々ふることの久しと思へば	ふるさとは見しごとあらずをののえのくちし所ぞこひしかりける	斧のえはみなくちにけりなにもせでへしほどをだにしらずざりける
巻二十・慶賀哀傷詞書「院の殿上にて、宮の御方より暮盤いださせたまひける(いしけのふたに)」	詞書「あひたまてのちに、やないしものところおはして、うちうちにとあるに、きたの方」			詞書「太上天皇のわのび給しに、むらさき野にいでさせ給ひしに」かまつりし	詞書「五うちたるに」 屏風歌か	詞書「つねにそへる女、四日はかり外にて」	卷第十八・雑下詞書「筑紫に侍りける時に、まかり通ひつゝ、暮打ける入るのときに、京へ帰りまうて来て、遣はしける」	詞書「これはかみのかぎりにすゑたる」

67	古今和歌六帖 (九七六～八二年頃か)	よみ人しらず	ふじの山なげきこるてふをのえのほどほしくもありしほどかな	第二・山・「をのえ」
68	賀茂保憲女集 (九九三年頃か)	賀茂保憲女 (生没年未詳)	にはたづみきしのみのこるあはみなに斧のえくたすながめなりけり	(雑)
69	道綱母集 (一〇〇七年以後)	道綱母 (?～九九五)	たきぎこることはきのふにつきにしをいざ斧のえはここにくたさむ	詞書「ためまのあをむの千部の経くちするに」中略くるまひきいて、かへり給ふに」拾遺和歌集」卷二十・哀傷
70	実方集 (成立年未詳)	藤原実方 (?～九九五)	やまびとのをのえはみなくちにしをいかなる人のつまぎこるらむ	詞書「また女に」
71	拾遺和歌集 (一〇〇五～〇六年)	よみ人しらず	なげ木こる人いる山のをのえのほとほとしくもなりにけるかな	題しらず
72	大式高遠集 (成立年未詳)	藤原高遠 (九四九～一〇一三)	かちまけの心のいとを見るほどにかくてやをのえもくたすらん	詞書「こうつ所」
73	江帥集 (成立年未詳)	大江匡房(一〇四一～一一二)	我がこひはをのえくちてとしふれどなげきのもとをこる人もなし	恋部
74	六条修理大夫集 (成立年未詳)	藤原顕季(一〇五五～一一二三)	ながむれば斧のえさへぞくちぬべきはなこそ千代のためしなりけれ	詞書「中院にて初和歌 見花延齡題」『和歌一字抄』下
75	堀河百首 (一一〇五年頃)	藤原公実(一〇五三～一一〇七)	斧のえのくちし所の山人のはかなき世にはなにかへりけん	雑「懷旧」
76	和歌一字抄 (一一五一～五四四年頃)	大中臣公長(一〇七一～一一三八)	をのえは木の下にてやくたさまし春をかきらぬ桜なりせば	下・留 詞書「山花留人」金葉和歌集 卷一・春部

87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77
		為忠後度百首 (一一三五年頃か)	教長集 (成立年未詳)	頼政集 (一一七八年頃)	散木奇歌集 (一一二七年頃)		永久百首 (一一一六年)		俊頼髓腦 (一一一〇一三年頃)	行尊大僧正集 (一〇八四一〇九四年頃か)
		藤原親隆(一〇九九一 一六五)	藤原為忠 (?一三六)	源頼政(一一〇四一 一七九)	源俊頼(一〇五五一 一二八頃か)	六条院女房 (生没年未詳)	肥後 (生没年未詳)	藤原仲実(一〇六四 一二二)	源俊頼(一〇五五一 一二八頃か)	行尊(一〇五五一 一三五)
		わが恋はをのえくちし人なれやはで七世も過ぎぬべきかな	いにしへの斧のえくちしことわざにけふもこころをうちつくしつる	山人のをのえくちしいにしへもかくおもしろきてをやめでけん	をのえをくたす山人帰りきて見るとも君が御代はかはらじ	あふまでとたちもかへらで程ふればをのえならぬ袖もくちけり	故郷はいかになりにしをのえのくつるもしらず年のへぬれば	我もいざたづね入りなんをのえおのくちけん山の跡をしのびて	さしながらまだをのえはくちなくにまがきもねやあらぬ里かな	やまちにてわがをのえはくたしてんうきよの中はこりはてめれば
		雑二十首	雑十五首「閉暮」	雑十五首「閉暮」	賀歌詞書「経脚賀茂にて歌合侍りしにまあり合ひて、祝の心を詠みける」	第七・恋部上詞書「恋の歌とてよめる」	雑三十首「仙宮」	雑三十首「仙宮」	雑三十首「故郷」	詞書「みねへいるにしら山ののじりのま ありたるに」『後葉和歌集』第九旅

96	95	94	93	92	91	90	89	88
拾遺愚草 (一二二六～三三年頃か)	式子内親王集 (成立年末詳)	石清水若宮歌合 (一二〇〇年頃)		六百番歌合 (一二九三年)		殷富門院大輔集 (一二八五年頃か)		久安百首 (一二一五〇年)
藤原定家(一二六二～一二四一頃)	式子内親王 (?～一二〇二)	皇太后宮 (生没年末詳)	顯昭 (生没年末詳)	寂蓮(一二三九～一二〇二)	女房 (生没年末詳)	殷富門院大輔 (生没年末詳)	藤原俊成(一二一四～一二〇四)	藤原親隆(二〇九九～一一六五)
跡たえて雪もいくよかふりぬらんをのえくちし岩のかげ道	斧のえの朽ちし昔はとほけれどありしにもあらぬよをもふるかな	をのえおのくちにし道に入らずともなな世の末は君ぞみるべき	をのえをなにかあやしとおもひけむしばしのこひも袖はくちけり	をのえもとしふる程はしるものをなどわが恋のくつるよもなき	をのえをかくてやひとのくたしけむやまちおほゆるはるの空かな	もろともにはこやのやまのうちにして斧のえくたしいざかたらはん	君が代はをのえくちし山人の千たびかへらむ時もかはらじ	ほどもなく朽ちぬる袖もあるものををのえとのみおもひけるかな
二見浦百首冬十首文治二年(一一八六) 詠作	詞書「後白河院かくれさせ給ひてのち、百首歌に」「新古今和歌集」卷十七雑中	祝	恋十・一二番「樵夫寄恋」	恋三・二五番「旧恋」	春下・五番「遅日」	詞書「これを見るにも心のどかにいはまほしなどありしか(へり事に)」贈答歌	慶賀二首	恋二十首